

# 習熟度別部会 研究のまとめ

## 1. 各グループの方向性との関連

### (1) G1グループ

#### <基礎・基本をさらに広げ、深める学習を目指すために>

- ・児童が自ら学び考えることができるように教材を選択したり学習場面を用意したりする指導の工夫

児童が自ら学び考えることができるように、自分が考えた方法を発表しあって練り上げる学習形態を取り入れて実践を行った。5学年ではワークシートを工夫し自分の考えを書き込めるようにし、友達の発表を聞いた後で自分の考えを修正させるようにした。そうすることで自分の考えを見直すことができ理解をさらに深めることができた。4年生でも一人一人の考えを紙に書かせて発表させ、友達の考えとの比較をさせることで自ら考える力の充実を図ることができた。3年生では実態にあわせて自分の考えを説明できるように絵や図などを書かせて発表させた。

このようにG1グループでは計算を素早くすることだけを重視するのではなく、話し合いや練り合いを通して自分の考えをまとめて発表できることに重点を置いて指導してきた。その結果、練り合いをさせることが自分の考えを深めさせ、自ら学ぶ力を高めることに効果的であることが分かった。

- ・児童が進んで取り組みたいと思えるような、知的でなおもしろさが感じられる指導の工夫  
発展問題として、学習指導要領から削除された内容や難易度の高い問題を提示したところ児童は興味・関心を示し意欲的に取り組んでいた。また単元とは直接関係ないが関連のある内容の問題をクイズ形式で提示する事で児童の解決意欲が高まり意欲的に取り組む様子が見られた。
- ・発展的な学習を通して算数を学ぶ楽しさと充実感を味わえるような単元構成  
単元構成まではできなかったが上述のように発展的な問題はG1グループにとって学ぶ楽しさと充実感を味わわせるものであることが分かった。今後は効果的な発展学習の与え方についてさらに研究を深めたいと考えている。
- ・人数が多い上位グループの児童の学習状況の適切な評価の工夫  
5学年より、単元の習熟の場面において児童の達成状況を把握し「自力解決グループ」「じっくり自力解決グループ」「先生に解き方のアドバイスをもらいたいグループ」の3つに分けて授業を進める方法が効果的であったと報告があった。人数が多い学習集団の中での効果的な評価の方法については確立していないが上述の方法は評価を次の指導に生かすという点において効果的な実践例であると言える。今後はさらに研究を深めて適切な評価のあり方を探っていきたいと考えている。  
ボランティアティーチャーに関しては、形成的評価の手助けとなったがボランティアティーチャーとの話し合いの時間をどのように確保するかなど課題がまだある。

### (2) G2グループ

#### <基礎・基本の定着を図るために>

- ・興味、関心を持たせるための発展問題の提示の工夫  
教科書を中心に簡単な問題から徐々にレベルアップを行い、最終的に発展プリントを行うように努めた。このことにより、発展プリントに挑戦しようと意欲を持って取り組むことができた。また、早く問題を解いた児童に作問を行わせ、内容、文章ともに的確に出来た場合には、グループ全員に提示し、いろいろな解き方で解くことができた。
- ・思考力、応用力を高めるための指導の工夫  
発表する際には、答えのみの発表ではなく、どのようにしてそうなったのかを付け加えるように試みた。自分の考えを自分なりに自分の言葉でまとめることで、以前よりもより深く考えるようになったし、計算ミスも少なくなった。また、一斉指導後には、ヒントを与えずに解き出来ない場合にはヒントをレベル1、レベル2、レベル3とヒントの与え方を工夫して個々の児童に応じて行うようにした。
- ・計算処理能力に違いがあるグループ内の単位時間ごとの評価の工夫  
ボランティアティーチャーと協力して、授業中の形成的評価はできるようになった。ただ、人数的にも20名以上になってきているので、どこでつまずき、どのように手だてをしたか等、個に応じてのきめ細かな評価はできない等、課題が残った。

### (3) G3グループ

#### <個に応じた指導実現のために>

- ・一人一人の基礎となる部分の習得状況の的確な診断、把握の工夫  
学習チェックカードを活用し、前学年までの既習内容について一人一人の習得状況を把握することができた。また、当該学年の学習内容についても「学習中」、「学習後すぐ」、「学習してしばらくたってから」、などと何回かに分けて繰り返しチェックを行った。その都度必要に応じて再指導を行い、基礎基本の確実な習得を図ることができた。
- ・単位時間ごとの学習内容の習得チェックの工夫  
単位時間ごとの習得チェックは、単にできた・できなかった、ということだけでなく、どういった手だてで理解が進んだか、どういったつまずきがあったかなどを具体的に記録することにより、次時の指導に生かしたり、個の学びの特性や個性に応じた効果的な学習方法を探るのに役立てることができた。そのチェックの積み重ねで、児童をいくつかの学習タイプに分けての指導が可能となった。
- ・一人一人の弱点を補うための、また学習内容の定着を図るための別メニュー学習を積極的に取り入れる。  
児童の「学習の習熟度」「学びの特性や性格」等に応じたタイプ別学習を導入することにより、児童は意欲を持続させて学習に取り組むことができた。タイプによって学習ペースや学習深度を変えたり、与える問題の量や質を変えたりすることで、個々の弱点に対応し、学習内容の定着を図ることができた。また、特別支援教育部と連携し、個々のつまずきや弱点に応じた指導法や手だてについて研究を深めることができた。

## 《成果と課題》

### (成果)

基礎・基本の確実な習得と、各グループの力に応じたレベルアップを図ることができた。

- ・児童の意欲が向上し、算数という教科に対し真剣に取り組む姿勢が見られた。
- ・児童一人一人の目標を明確にさせ、個々の実力の伸長を図ることができた。  
(100ます計算の実施、基礎基本の手引きや学習チェックカードの活用、家庭学習の習慣化など)
- ・ボランティアティーチャーの支援を受けることで一人一人の授業中の形成的評価が行き届き、学習内容を確実に身に付けさせることができた。
- ・各グループで児童の力に応じた指導の工夫をすることにより、どのグループもレベルアップさせることができた。

グループ編成の定着化を図ることができた。

- ・グループは原則一年固定、グループ移動は担任と算数担当の話し合いで決定、などグループづくりに関する共通理解が徹底した。
- ・習熟度別グループの組み方やグループで目指す目標を明確にすることができた。
- ・学習の目標を教師が明確に示すことで、児童の自己選択能力が向上してきている。

グループ単位の研究組織を有効に機能させることができた。

- ・上位群、中位群、下位群のグループの実態に即した授業づくりや指導法が見えてきた。
- ・グループの抱える課題や悩みを共有化することができ、タイプ別学習など学習形態を工夫したり、指導法の工夫をしたりすることができた。

## （ 来年度へ向けての課題 ）

習熟度別に分けている意義を再確認し、G 1 ~ G 3 の授業の違いをはっきりさせる必要がある。

- ・ 習熟度を考慮した学習内容の追加や削減、学習深度の深浅を研究していく。
- ・ グループごとの各単元での到達目標をはっきりさせる。
- ・ 各グループで、個々の児童についてつけさせたい力や、個々の課題を洗い出し、指導の方向性を探る必要がある。

ボランティアティーチャーの支援のおかげで授業中の形成的評価ができるが、学習内容にまで踏み込んだ活用をするには、細かな打ち合わせや指導方法の確認が必要であり難しい面があった。

- ・ 学生ボランティアを活用するなどして、算数の学習内容にまで踏み込んだ支援をお願いできるようになると、特に人数の多いグループにとってはより効果が上がるのではないか。
- ・ ボランティアの支援を受けて有効だった単元や、どのような形態で入ってもらって効果的だったかなど記録を残しておくといよいのではないか。

学習内容についてそれぞれのグループにおける具体的な指導手立て（どんな内容を、どんな方法で、どこまで）を明確にし、共有化する必要がある。

- ・ 使用するプリントの検討をするなど各グループ間の系統的指導の研究を深める。
- ・ 習熟度別指導に関するおたよりを発行し、児童にも保護者にも、今学習していること、学習のポイント、家庭で協力してほしいことなどを伝えていくようにするとよいのではないか。

G 1 , G 2 , G 3 の縦割り研究グループメンバーが、学年の枠をこえているので、話し合いの時間がなかなかもてなかった。また、学年 1 名の研究推進委員なので、推進委員会での話し合いの内容が、各グループに下りてこなかった。

- ・ 研究推進委員を学年代表からグループ代表にしてほしい。
- ・ 研究グループで一斉に研究できる日を設定してほしい。